

■ オレンジ色の封筒 ■

見覚えのあるオレンジ色の封筒が我が家に届いたのは、53歳になって間もなくの頃だった。角型2号で厚さが1cmほど。すぐに察しがついた。これが2回目だからだ。ドナー候補者に選ばれたことを知らせる骨髓バンクからの書類だ。私とHLA型(ヒト白血球抗原型)が一致する誰かが白血病で、骨髓移植でしか助からない状況にあることを意味していた。

提供意思と家族の意向の条件が整えば、コーディネーターや医師と面談し、採血へ進む。ドナー候補は最大5人。その中から最適者を医師が選ぶ。私は最終候補にはならなかったが、待機を要請された。移植では骨髓細胞をドナーのものに置き換えるため、レシピエントのそれを放射線や薬品で全て破壊する。その時点でドナーに突発的な事態が発生すれば、患者は生命を保てない。そのための保険である。

1度目は40代だった。封筒が届いてから移植まで、通常は4カ月くらいかかるが、緊急な対応を要請される可能性があるケースだった。つまり移植を急いでいた。採血までしたが、早々に候補は解かれた。型の詳細が合わなかったのか、提供可能期間が合わなかったのか、理由は分からない。もしかすると患者の身に何かあったのかもしれない。

病魔は時に、故なき試練を人に強いる。昨日、競泳女子の池江璃花子(18)が、自身のツイッターで白血病と診断されたことを公表した。体調不良で合宿地のオーストラリアから緊急帰国し、検査を受け診断が出た。「未だに信じられず、混乱している状況」と胸の内を明かしている。やり場のない思いに胸が押しつぶされそうになった。

リオ五輪では日本人選手最多の7種目に出場を果たした。昨年の日本選手権で、6個の日本新記録を更新、直近のアジア大会では史上初となる6冠を達成している。東京五輪での活躍へ誰もが応援していた。本人の無念さはいかばかりだろう。

「しっかり治療をすれば完治する病気。今は少し休養を取り、治療に専念し、1日でも早く、また、さらに強くなった姿を見せられるよう頑張っていきたい」と綴られている。強い人だと思う。

私が骨髓バンクに登録した動機は簡単だ。もし自分や家族が移植でしか助からないとしたら、ドナーが現れることを切望するであろう。だとしたら、多くのそのような人のために自分ができることがあるなら進んで協力すべきではないかと考えた。

ドナー候補の待機期間中は健康管理に留意した。万が一の責任だけは果たしたかった。待機解除の連絡があったのは、移植予定時期の後だった。きっと移植は成功したのだろうと推測し素直に喜んだ。私の造血幹細胞が直接誰かを助けた訳ではないが、骨髓移植が安全に行われるために一役立てたのであれば、それだけでうれしかった。

この経験から学んだことがある。私と同じ型で移植を希望する患者が2人もいたことだ。希望をしても、型が合うドナーが見つからず、命を落とす人も少なくないと聞く。

年齢制限を超えた今、もうオレンジ色の封筒が私に届くことはない。昨日の衝撃の一報を目にして、抗えない運命に、描いていたものとは違う未来を生きることになるかもしれない彼女に、奇跡が起きないかと静かに願った。